

## 関税局

# 「女性の働き方研究会」 新進気鋭の小説家、芦崎笙氏こと 松村参事官を囲んで

関税局業務課課長補佐 中西 佳子



### (はじめに)

関税局女性職員有志が集まり、オフサイトミーティングとして「女性の働き方研究会」\*1を結成した。記念すべきキックオフ（第1回会合）には、小説「スクールの夜」で組織の中で働く女性の苦悩・葛藤を見事に描き、第5回日経小説大賞を受賞した新進気鋭の小説家、芦崎笙先生こと松村参事官をゲストに招き、インタビューを通じて仕事と女性というテーマについて意見交換を行った。本稿ではポイントのみご紹介したい。

※参加者

ゲスト：芦崎笙こと松村武人（大臣官房参事官（関税局））

司会：東海梨香（関税局関税課経済連携室 上席調査官）

パネリスト：嶋影正樹（関税局総務課事務管理室

関税政策専門官）、香川里子（関税局関税課課長補佐）、阪本康仁（関税局業務課 総括係長）

◆司会 日経小説大賞の受賞、おめでとうございます。小説「スクールの夜」では、メガバンクの中枢で葛藤する女性総合職1期生の主人公、吉沢環の姿を通して、女性の働き方、組織で働くことの厳しさなど、我々読者が日々直面するようなシーンを描いている。

### (女性は男性より強い?)

◆司会 環が女性だから下駄をはかされていたと指摘されて落ち込むシーンについて、実際の女性はもっと精神的にタフではないかという声もある。また、女性の方が男性よりも性根の悪い人が多いという意見もあるが。

◆松村参事官（以下、松村） 財務省の女性は、も

\*1) 「女性の働き方研究会」の目的は、①女性が働くための職場環境改善に関する意見交換、②女性職員のロールモデル、キャリアパス、ワークライフバランスについてノウハウを共有、③女性職員のネットワーク構築。



っとタフな方が多いが、小説の中では、身近で共感が得られやすい女性に描いた。家庭では男性より女性の方が強い。社会でも女性の方がワルだ。したがって職場で女性の方が弱いというのは幻想（笑）。実際に関税局内の女性は実にのびのびと活躍している。過去に女性

の上司に仕え、部下に女性を持った事もあるが、みな個性的だった。女性は弱いのかばってあげようなどということ自体おこがましい。女性だからと意識しないことが一番大事。

## （仕事と家庭について）

◆**司会** 小説の中でエリート行員は私生活を犠牲にすることを厭わないと描いているが、仕事のために家庭や子供を犠牲にすべきなのか。

◆**松村** 仕事と家庭とどちらかだけというのはおよそありえない。専業主婦の子育てが仕事をしている女性の子育てより常に優っているわけではない。知人でメガバンクの海外支店長を歴任している女性は、外国人の夫と結婚生活19年のうち9か月しか同居していない。それで家庭を犠牲にしているわけでは全くない。どっちをとるか考えたたん意欲も能力も下がってしまう。両立のさせ方は人により異なる。

◆**阪本係長（以下、阪本）** 関税局や税関で働いている女性を見ても、女性の中でも個人差があると感じている。女性でもそれぞれ求めている幸せは違うのではないか。

◆**司会** 仕事を続けたいと思っている女性が、仕事と家庭は両立できるものとして、取り組むような環境を作ること、個人の意識改革も重要なのでは。

## （キャリアウーマンへの世間の風当たり）

◆**司会** 主人公の母親は、結婚や子育てを女の幸せと考え、女性の中でも環のようなキャリアウーマンを批判的に見る人もいる。

◆**松村** キャリアウーマンを批判的に見る人もい

るが、気にしてもしょうがない。主人公の母親は純粋に娘のことを心配して無理しない方がいいのではと思っています、これは世代の違いの問題。子供は手をかけると上手く育たない。現代の満たされすぎた家庭でどうやって手をかけないようにするか。暴論だが、最近の男性が弱くなっているのは、母親が息子を大事に育てすぎたから。一方、母親は娘にはあまり手をかけずに放任するため若い女性世代はみな強く育っている。次世代のためにも、女性は働いて、息子に手をかけられないようにしたらよい（笑）。

◆**香川補佐（以下、香川）** 世間にはいまだ3歳児神話（3歳までは母親が手をかけて育てる方がよいという考え）が根強く、子供を預けて職場復帰をする際に迷った。実際に預けたら保育園は素晴らしく、子供の中で切磋琢磨してうちの子供は強くたくましい女性として育っている（笑）。

◆**嶋影専門官** 私はキャリアウーマンの女性と結婚したので仕事と育児の両立が問題となったが、育児・家事を分担し、子供が病気のときは仕事を休んで看病もしている。子供が1人のときは何とかこなせたが、2人目が出来てからは負担が重く夫婦だけでは難しくなり、両親の支援を得ることにした。妻は他省で働いているが、財務省に比べて女性が多い職場で、育児で時間制約がある中、妻も先輩職員から仕事と育児の両立のノウハウを学び、いろいろ工夫して働いている。その点財務省・関税局は遅れていて、先輩からノウハウを得ることも難しい男性中心の社会なのではないか。香川補佐などワーキングマザーがようやく出てきた段階であり、これからだと思う。今後は、ノウハウが蓄積されていくようになることを期待したい。



◆香川 女性が集まると、自然とどうすれば業務を効率的にできるか話すが、男性はどうか。育児のノウハウが共有される機会はあるのか。

◆阪本 我が家も共働きで、両親は遠隔地にいるため夫婦2人で4人の息子を育児中であるため、育児に関する情報には敏感な方かもしれないが、一般的には職場の中で男性同士では育児について話す機会は少ないように思う。男性が集まれば、仕事の愚痴になってる気が・・・(笑)。

## (財務省の仕事の醍醐味、職場環境の改善)

◆司会 小説は仕事とは何かもテーマになっているが、仕事との向き合い方、また、財務省、関税局の仕事の醍醐味についてどう考えるか。

◆松村 我々の仕事は、言いたくない事、相手が嫌がる事を言って戦わなくてはならないこともしばしばある。プロスポーツ選手や芸術家のようにやりたいことだけやって道を極めてメンが食えれば最高だが、サラリーマンである我々は労働力を切り売りし、神経をすり減らすことによって給料をいただいている存在。その中でどうやりがいを見つけていくかが大事。公務員は100を目指して様々な相手と調整しながら最終的に60でも実現できれば御の字。それが法律や制度、ルールとなり、世の中の仕組みとして動き出していくことが、仕事の醍醐味ではないか。

◆司会 関税局・税関での女性の活躍はこれまで十分ではなかったが、女性のみならず育児中の男性、介護中の職員など、多様な事情を有する人が働きやすい職場にするためにはどのような職場環境の改善が必要か。

◆松村 本会合のような、いわゆるオフサイトミーティング、つまり真面目な話を気楽な場でやるということもとても良いこと。関税局が現在取り組んでいるサークル活動なども大いにやってほしい。仕事の直接の責任を離れると、普段いやな上司と思っていた人もいい面が見えてくるもの。

◆司会 女性、男性が共に働くための職場環境を良くしていくには、職

員個人の意識改革と組織のサポートの両面において努力していく必要がある。本日は大変有意義なお話を伺い、ありがとうございました。

## (おわりに)

ゲスト、パネリストともに多様な立場・世代を反映した意見交換となり、大変示唆に富むものであった。特に松村参事官は「両立のさせ方は人により異なる」と指摘しているが、確かに一言で仕事と育児の両立といっても、夫は育児に協力的か、両親は近隣に住み健康か、居住地域の保育環境はどうか、子供は何人か、体は強い方かそれとも病気がちか等の事情で育児にかかる時間は大きく違ってくる。そもそも女性側においても、人生の中で仕事とプライベート(家庭・育児)の比重をどうするか多様な価値観がある。働く女性の置かれている状況とは、このように(刻々と変わる)育児環境面、そして個々の女性の価値観という連立方程式を解きつつ、その時々最適状態を模索し、また全体のパイを広げるため業務や家事の効率化を図りつつ、時間を最大限有効に使う努力の連続なのかもしれない。

組織の中で女性が活躍するためには、女性職員の側では、意識改革や業務効率化のための創意工夫が大事であり、組織の側にも、女性のおかれている状況の多様性を踏まえ、仕事と育児の両立のあり方について一つの型にはめず、個々の複雑な事情を踏まえた多様な働き方を許容し、推奨していく懐の深さが求められるのではないかと感じた。

